

# 平成27年度 事業報告書

## 1. 競技普及に関する事業

### (1) 挑戦の継続と目標

ピョンチャンオリンピックは2年後となった、サイクルはあっという間に来ってしまう。出場することの参加から入賞獲得のための参加に目標を変え、2年目のシーズンが終わった。まだ主力選手はソチ以前のメンバーであるが、ユースオリンピックへの参加や今期初めて海外遠征に言ったメンバーも多数現われ、ジュニア世代への期待をつなげ北京オリンピックに向けても新たな可能性を感じることが出来ることとなった。海外コーチの継続、ボブスレーを中心にマテリアルの充実、トップ選手のワールドクラスの大会参加等がおこなわれ、より多くの国内合宿も開催された。

### (2) 公益法人として貢献

公益法人化を終え、実際にどのように社会に対して我々は恩恵を人々に与えられているか、結果を出さなければならない。このスポーツを通じて夢や希望を持ってもらうことができているか、示さなければならない。今期は各地でこの競技の体験会を開催し、素晴らしさ、楽しさを知ってもらい、新たな選手発掘のためにトライアウトを開催し、その中から実際に世界に挑戦することになった。また新たな指導者養成システムを確立し、公認コーチが誕生しこれからの選手育成にあたり、審判資格講座、試験を通じて大会運営に多くの方々が参加することとなった。今後も門戸が開かれ、誰もが参加できる連盟運営に心がけていく。

### (3) 財源計画の充実

公益法人として、自主財源の計画的な見通し、確保は絶対条件である。何のために免税となって寄附集金ができるのか、全理事、役員にその認識をもって今後財政運営に当たらなければならない。現時点では大口寄附と補助金で収入の大部分を占めているが、継続的なスポンサー、参加者が増えて負担金の拡大、数多くの寄附者の定着が必要で、5年計画、10年計画を機関決定しなければならない。今期は目標額を越える収入を得たが継続的な財政計画を作成決定することは出来なかった。今後の大きな課題である。

## 2. 競技力向上事業

2018年平昌五輪に向けて、下記の競技力向上事業を実施した。

### (1) ナショナルチーム・Jrの選抜と強化

2018年平昌五輪に向けた競技別の強化目標を定め、海外派遣選手の選考プロセスに則り各種選考会を実施した。ボブスレー競技はトライアウト、全日本プッシュ選手権、コンバインテスト等で資質・能力に優れた選手を選抜・強化し、ニッキヘッドコーチ指導の下、女子5名、男子3名を海外遠征メンバーに選出しヨーロッパカップを転戦した。スケルトン競技は、海外派遣選手選考記録会、全日本Push選手権大会等の結果を基に各カテゴリー別の代表選手を選考した。前期は、WCに男子1、ICCに男子1、女子1、NACに男子3、女子2を派遣した。後期は、WCに男子1、女子1、ICCに男子1、女子

1、NACに男子2、女子2、さらに極めて重要な世界選手権には男子1、女子1、世界Jr選手権大会には男子1、ユースオリンピック冬季大会には、男子1、女子2をそれぞれ派遣した。リュージュ競技は、金山選手をナショナルメンバーに選出し、WC、世界選手権大会に派遣した。

## (2) 海外遠征と国際試合参加

平成26年度事業計画に沿って実施した。

### ①ボブスレー競技

押切麻李亜：IBSF ランキング 30 位、EC 最高成績 7 位

本間 南：IBSF ランキング 35 位、EC 最高成績 9 位

浅野晃佑：IBSF ランキング 82 位、EC 最高成績 27 位

黒岩俊喜：IBSF ランキング 85 位、EC 最高成績 35 位

### ②スケルトン競技（主要な選手）

高橋選手：IBSF ランキング 21 位。世界選手権 20 位。WC 最高成績 13 位。

笹原選手：IBSF ランキング 36 位。ICC 最高成績 7 位。

宮島選手：IBSF ランキング 55 位。NAC 最高成績 2 位。世界 JR 選手権 16 位

小口選手：IBSF ランキング 22 位。世界選手権 22 位。WC 最高成績 13 位。

小室選手：IBSF ランキング 41 位。ICC 最高成績 12 位。

### ③リュージュ競技

金山英勢：WC 最高成績 22 位。世界選手権 32 位（2 本目進出できず）

## (3) 指導者育成と強化

今年度は、上級コーチ1名、公認コーチ3名の合計4名が競技委員会の承認を受け、日本体育協会の共通プログラムと日本連盟の専門カリキュラムを受講した。その結果、昨年度からの継続受講者を含めて4名が公認コーチの資格を取得した。

上級コーチ：小口 貴久 公認コーチ：住澤祐樹、大峽俊之、大井伸司

## (4) 有望選手の発掘・育成・強化

ボブスレー競技において、有望選手獲得のためのトライアウトを数回実施し、数名の中から2名のポテンシャルの高い新人選手を発掘・育成・強化した。参加女子選手の1名がボブスレーナショナルチームに選出されヨーロッパ遠征にプレーカとして出場した。もう1名の女子選手は、JSCのスケルトン女子事業に選抜され、各種海外強化プログラムを体験し、NACの日本代表メンバーに選出された。

## (5) マテリアル開発の推進

今年度は、下町が開発製造しているボブスレーとドイツ製ボブスレーの氷上におけるパフォーマンスを分析・評価するためのボブスレー日本代表用そり選定テストを11月にドイツのケニグゼーで実施した。その結果、加速力に優れたドイツ製の櫂（シンガー）を平昌五輪の女子チームで採用することを決定した。

(6) 医・科学サポート事業の推進

今年度は、全日本選手権大会前に2回のドーピング講習会を実施し、フェアプレイ精神の啓蒙活動を実施した。また、JISSと連携したスポーツ栄養プログラム講習会にスタッフを派遣して情報収集を実施した。さらに、スパイラル通信として各都道府県連や選手に広くソリスポーツに関する情報を発信した。

(7) 海外優秀コーチの育成・強化プログラムの導入

ニッキヘッドコーチから指導を受けたボブスレーの新プッシュ技術とマテリアル関連の設定と補修プログラムを導入し、海外遠征時に実践・研修を受けた。

ウイリーコーディネーターからは、ユースオリンピックのヘッドコーチとしてソリとランナーの正しい設定方法やライン取りについて指導を受けた。

(8) 女性競技種目戦略的強化プログラム開発への連携

JSCの女性競技種目戦略的強化プログラム（スケルトン）事業においては、ユース世代も含めた選手の発掘・育成プログラムをJBLSFとして全面協力の下、新たな先進的選手発掘・育成プログラムのモデルとして位置付け実践した。その結果、このプログラムで教育・指導を受けた伊地知選手が、ユースオリンピック冬季大会の出場権を獲得し、本大会では世界のトップ10に入った。

3. 本年度公認大会

(1) 国際大会（会場：長野スパイラル）

大会期間	種別	大会名
27. 12. 24～27	L	第1回 アジアリージュ選手権大会

(2) 国内大会（会場：長野スパイラル）

大会期間	種別	大会名
27. 9. 20	S	2015 全日本プッシュスケルトン選手権大会
27. 9. 20	B	2015 全日本プッシュボブスレー選手権大会
27. 12. 11～12	S	2015/2016 全日本スケルトン選手権大会（予選）
27. 12. 18～20	B	2015/2016 全日本ボブスレー選手権大会
27. 12. 24～26	L	第49回 全日本リージュ選手権大会
27. 12. 24～26	L	第23回 JOCジュニアオリンピックカップ競技会
26. 12. 25～27	S	2015/2016 全日本スケルトン選手権大会（本選）
27. 1. 23～24	B・L・S	第7回 JBLSFチャレンジカップ大会
27. 1. 23～24	B・S	第23回 JOCジュニアオリンピックカップ競技会

※B…ボブスレー、L…リージュ、S…スケルトン

#### 4. 審判資格取得研修会、養成講習会

各加盟団体の主催による審判資格取得研修会等が以下のとおり行われた。

これらの講習会により、6名が審判員資格を取得した。

年月日	連盟	種別	会場	研修会名
26. 11. 15	大阪	B、S	サンライフ明石（兵庫県明石市）	審判・ルール講習会
27. 11. 21～22	長野県	B、S、L	県連事務局（長野県長野市） スパイラル（長野県長野市）	審判員資格取得講習会 審判クリニック研修会

※B…ボブスレー、S…スケルトン、L…リュージュ

#### 5. 各関連会議

##### (1) 国際会議

2015. 5. 30-6. 1 F I B T コングレス ギュント/ベルギー 北野会長出席

2015. 6. 19-21 F I L コングレス ピョンチャン/韓国 鈴木理事出席

##### (2) 国内各種会議

日本オリンピック委員会（評議員会・総務委員会・国際部・選手強化本部委員ほか）

日本スポーツ振興センター（振興基金・振興くじ）、日本体育協会（評議員会）

ナショナルトレーニングセンター（運営委員会）、国立スポーツ科学センター、

アンチ・ドーピング機構、スパイラル（計画会議）等出席

#### 6. 委員会事業

##### (1) 総務委員会

公益社団法人への認可業務をおこない、それにあわせて事業計画、予算執行、決算を行った。6月1日から9月28日以前は一般社団法人としての会計、それ以後は公益社団法人としての会計業務を行い、決算を作成した。

また整備されていない規程、規約の変更を行い制定につとめた。

選手証、指導者証、審判員認定証を新たに継続作成し、登録管理を行なった。また昨年度より変更・追加登録を総務委員会で承認することを継続した。

国際連盟や国内関係団体との連絡、調整にあたりと共に、諸会議に出席した。

JOC、JSC、TOTOくじからの事業助成金申請及び事業報告を行い、金額を確保した。ただしJOC強化補助金が期末に多く入金され余剰金として繰り越しとなった。

##### (2) 競技委員会

###### 【競技強化部】

###### 《ボブスレー部》

昨シーズンは2018年平昌オリンピックにおいて女子入賞を実現させることを第1の目標として事業を展開した。7月の第1回強化合宿を経て、関西・関東地区で行ったトライアウトでの人材発掘、そして9月に開催された全日本プッシュ選手権、コンバインテストにおいて海外遠征メンバー女子5名を選出、男子においては2022年の北京オリンピックを見据え3名の海外遠征メンバーを選出し、ニッキへ

ッドコーチを中心に11月よりヨーロッパカップを転戦した。

#### EC 第1戦(ウインターベルグ)

(女子) 7位 押切麻李亜・浅津このみ(84p)

DNS 本間 南・川崎奈都美

(男子) 31位 浅野晃佑・伊藤隆太

#### EC 第2戦(ウインターベルグ)

(女子) 11位 押切麻李亜・浅津このみ(68p)

12位 本間 南・日下望美(64p)

(男子) 31位 浅野晃佑・黒岩俊喜

#### EC 第3戦(アルテンベルグ)

(女子) 9位 本間 南・日下望美(76p)

10位 押切麻李亜・浅津このみ(72p)

(男子) 22位 浅野晃佑・黒岩俊喜(28p)

#### EC 第6戦(ケニクゼー)

(女子) 12位 押切麻李亜・浅津このみ(64p)

14位 本間 南・日下望美(56p)

(男子) 27位 浅野晃佑・黒岩俊喜(16p)

#### EC 第7戦(イーグルス)

(女子) 13位 押切麻李亜・浅津このみ(60p)

16位 本間 南・川崎奈都美(48p)

(男子) 35位 黒岩俊喜・伊藤隆太

#### EC 第8戦(サンモリッツ)

(女子) 16位 押切麻李亜・浅津このみ(48p)

18位 本間 南・川崎奈都美(40p)

(男子) ケガのため出場せず

#### IBSF ポイント

押切麻李亜 396ポイント (IBSF ランキング 30位)

本間 南 284ポイント (IBSF ランキング 35位)

浅野晃佑 44ポイント (IBSF ランキング 82位)

黒岩俊喜 0ポイント (IBSF ランキング 85位)

2015/16 女子 IBSF ランキングにおいて押切が 30 位 (396 ポイント)、本間が 35 位 (284 ポイント) となり、2 選手の 2016/17 シーズンのワールドカップ昇格が有望となった。男子においては IBSF ランキングで浅野が 82 位 (44 ポイント)、黒岩が 85 位 (0 ポイント) であり、ワールドカップに昇格できる成績を残すことができなかったが、パイロットとして貴重な滑走経験を積むことができた。

2018 年平昌オリンピックで入賞の目標達成のためにはスプリント能力の極めて高いブレイカー選手

の発掘が必要不可欠である。平昌に向け経験を積んできている押切・本間・浅津のパイロットとして操作技術のさらなる向上を図り、世界で戦えるブレイカー選手の発掘、スカウトを最大限の目標とし強化していきたいと考えている。

### 《リージュ部》

#### シニア選手強化

シニア選手の強化では、平昌オリンピックの出場の可能性の高い金山選手に的を絞り、今年度から再びイタリアチームとのパートナーシップを組み強化した。

イタリアチームの指導者はアルミン・ツェゲラーをヘッドコーチに、数名のオリンピックメダリストから指導を受けてのシーズンとなった。

イタリアチームからの指導を受け、確実に実力をつけて来ているのがソチオリンピック前と、今シーズンとのタイム、ワールドカップ第3戦の成績や、ワールドカップの参戦回数(3/5回)、上位選手とのタイム差からも読み取ることができる。

世界選手権では、1本目の滑走の少し前からミズレが降り始め、コースコンディションが急激に落ち、予想を下回る結果となった。

また、イタリアチームが開発したマテリアル(ランナー等)の提供も受けることもタイムの向上の要因となり、成績へとつながったと考えられる。

スタートタイムが大きな課題となっていたが、11月3日にオーバホフでの練習中に転倒。右肩を痛め、改善されないままシーズンは終了となっている。

帰国直後に長野整形クリニックにて受診。右肩の亜脱臼が認められ、周辺の筋肉や腱の炎症が認められた。そのような状況で、5割~7割位でのスタートでの成績となっている。

また、滑走中の力みや強い操作が少し目立つ。ソチオリンピックシーズンに比べると改善はされているが、そこも今後の課題となった。

今後の課題に対しての取り組みとして、イタリアチームと連携をとり、トレーニングメニューの見直し、スタートトレーニングのバリエーションを増やすなど、スタートに特化した練習メニューを計画している。合宿や練習会の機会を活用し、競技ルールや倫理、競技者としての心構えなどの研修会を開催する。

#### 競技成績

WC1	インスブルック	NC (WC 予選大会) 22位	WC	未出場
WC2	レイクプラシッド	NC (WC 予選大会) 21位	WC	未出場
WC3	ソルトレイクシティ	NC (WC 予選大会) 14位	WC	22位
WC5	シングルダ	NC (WC 予選大会) 18位	WC	31位
WC6	オーバホフ	NC (WC 予選大会) 21位	WC	31位
世界選手権	ケニックゼー	1本目 32位	2本目	未進出

#### ジュニア選手強化

今年度は12月、2月の2回のジュニア対象の合宿をおこなった。

12月の合宿では特に小林 新野(中学2年)の二名が成果をあげた。小林については、滑走フォームやラインなどが安定していて、アジア選手権に来ていた他国のコーチからもお手本とされるほどの成長をみせた。昨年まで、自分から要望を出すなどの積極性には欠けていたが、選手としての自覚、積極

性、向上心などが芽生え、結果として滑りや成績に出てきている。また、新野などの女子選手も小林同様、選手としての成長をみる事が出来た。

2月の札幌での合宿では、長野の選手には違うコースを滑ことで様々な経験をすることが出来た。札幌の選手には新たな同世代の選手が来ることで、藤野以外のコースを意識することで、新たな挑戦の意識が芽生えた。ジュニア選手の交流をすることで、狭い範囲での競技活動の意識が少しずつ大きくなることで、ジュニア期から世界などを意識することへつながる事を期待したい。

今後の課題として、体の成長に合わせた橇などの1ランク上のカテゴリーのマテリアルの確保が必要となる。現在、シニア選手との体重差で30キロ、ソリも含めると40キロ以上の重量差がある。ソリ競技にとってこの差はかなりのタイム差となる。それにもなって筋力や体力の強化、意識や技術、専門的な知識の習得が必要となる。成長に合わせて

また受験や定期試験の対策としての学校や家庭の理解を得ることが重要と考える。

競技の発展普及には次世代を担うジュニア層選手の強化育成が必要不可欠であり、今後国際大会への出場を含め、ジュニア選手強化育成事業が益々活発になることを期待する。

主だった成績

小林 誠也	全日本選手権	4位 (初参加)
	JOC ジュニアオリンピックカップ	2位
新野 彩季	全日本選手権	1位 (初参加)
	JOC ジュニアオリンピックカップ	1位

## 《スケルトン部》

### 2015-2016 日本 WC/ICC/WM 活動報告 (反省・成果・課題)

#### 1. 【世界の現状分析】

##### ①スプリントの高速化

トップ No1 選手の走力はこれまでと同様に速いが、向上している訳ではなく現状維持である。しかし、トップ選手を猛追する第二グループ集団の選手達の走力は男女共に向上している。

##### ②滑走 (操作技術) の安定と精度向上

WC、WM での男子 10 位以内、女子 8 位以内の選手達は、目に見えるはっきりとしたミスはしない。それ以下の選手達は、横滑り、壁へのヒット、ライン取りミス、プッシュ時のミス等がある。

##### ③強靱な精神力

WC、WM での男女共に上位選手達は、練習時に比べ試合時での集中力、闘争心が高まり成績に好影響となる。また、スプリント、滑走 (操作技術) の精度、タイムも向上する。ミスをしない。

##### ④用具 (ソリ、ランナー) の精度向上

用具開発は資金との関係が密接である。上位選手達は、体力、技術もさることながら団体としても、個人としても資金の循環が良い。したがって、用具開発が積極的に行われ毎シーズン進化している。

##### ⑤チーム力向上 (チームワーク、個の力、スタッフの充実 (人数、役割))

個人競技であるものの集団 (チーム) として選手、スタッフそれぞれに協調性が高く、一丸となって目標 (チーム、個人) 達成に取り組む姿勢がある。例えば、試合時、自分の滑走を終えた選手は、他の選手の応援を行う。自分の結果がどうであれ、結果が良かった選手を称賛し、悪かった選手に

は劳う。また、選手、スタッフ、お互いに頑張った事への感謝、尊敬を忘れない。ハグや握手の実施。

選手個人としては、情報を整理し取り入れる能力、自分を客観視する能力、環境を整備する能力が優れている。

スタッフが充実している。一人が複数の役割を兼務する場合もあるが、最低でも滑走コーチ 2 名、コンディショニングコーチ 1 名、フィジオ 1 名で構成されている。

#### ⑥活動予算と事業の充実

潤沢な予算により、事業が充実している。試合期前後の複数コースでの滑走練習、用具テスト。

#### ⑦情報戦略の充実

大会スケジュール、ルール変更、滑走練習場所の確保、他チーム・選手の動向、用具（調査、研究、開発）、その他の情報収集と対策が迅速に行われている。

### 2. 【日本チームの現状から見た反省と評価】

\*今シーズン、大会名、時期は異なるが 4 選手（高橋、笹原、小口、小室）共通して出場のあった Iglis 大会の内容から分析評価する。

\*4 選手出場の Iglis 大会には、スプリント世界最速の男子アレキサンダー・トレチャコフ選手、女子エレナ・ニキティーナ選手（共にロシア）の出場があり、4 選手のスプリント力の現状を分析した。

\*添付資料：2015-2016 日本チーム WC,ICC,WM 活動報告（成績一覧）

#### ①成績 添付資料参照

日本選手男女共に競技力（走力、滑走技術）は昨シーズンと変わりが無い。しかし、世界の上位を狙う選手達のレベルが上がっている為に成績は落ちている。この状態のままでは益々成績は下降線をたどることは間違いない。前期 ICC 女子において小口選手は上位成績を納めているが出場した大会内容（選手レベル、人数）を分析するとその成績は平凡である。

近年のスケルトン競技は男子ではまずスプリント力が無ければ勝負にならない。世界の上位選手はスプリント力、滑走技術の両方がある。当然、スプリント力、滑走技術の両方の能力が無ければ WC、WM での上位成績の獲得は皆無で、20 位以内に入ることも困難である。

女子については、まだスプリント力よりも滑走技術の要素が勝敗に関係しており、滑走技術があれば勝負は出来る。しかし、スプリント力の重要性が年々問われて来ていることを見逃してはならない。恐らく近い将来、女子も男子と同様にスプリント力が勝敗に密接に関係するであろう。

#### ②スプリント力 添付資料参照

高橋選手 トップとの差：0.33 秒、評価：遅い WC15 位前後の可能性はある

笹原選手 トップとの差：0.47 秒、評価：超遅い WC20 位前後の可能性はある

小口選手 トップとの差：0.35 秒、評価：遅い WC15 位前後の可能性はある

小室選手 トップとの差：0.54 秒、評価：超遅い WC20 位後の可能性はある

\*スプリント力から予測した獲得成績の可能性は滑走を完璧に行った場合とする

#### ③滑走技術 添付資料参照

高橋選手 トップとの差：1.17 秒、評価：低い WC20 位後の可能性はある

笹原選手 トップとの差：1.30 秒、評価：普通 WC20 位後の可能性はある

小口選手 トップとの差：1.53 秒、評価：低い WC20 位後の可能性はある

小室選手 トップとの差：1.60 秒、評価：普通 WC20 位後の可能性はある



\*評価は、スプリント力とゴールタイムを比較して行っている

\*予測獲得成績は、トップとの差が1秒以内で20位以内として予測している

#### ④精神力

高橋選手 評価：低い、理由：試合時の滑走が練習時よりも悪い

小口選手 評価：低い、理由：試合時の滑走が練習時よりも悪い

笹原選手 評価：

小室選手 評価：

\*笹原選手、小室選手の評価は、活動を実際に見ていないので出来ない

#### ⑤用具

4選手が使用している用具（ソリ、ランナー）についての分析評価は困難である。但し、共通して言えることは用具に関する正確な知識、そしてそれによる自己への最適な用具の調整、選択が出来ているか否かについては不十分ではないかと思う。選択に当たっては、理論や根拠、そして感覚が必要と思う。

#### ⑥チーム力

チーム力、個の力、スタッフの充実、全て充実がなくレベルが低い。

原因：男女別チーム構成の不具合、取り組みの差、意識レベルの差、尊重・尊敬意識の欠如、行動規範の不徹底、人間力の欠如、コミュニケーションの不足、リーダーの不在、客観視能力の欠如、マネジメント能力の欠如、スタッフの不足

#### ⑦活動予算と事業内容

高橋選手には予算、事業内容共に良い環境であった。その他3選手には不十分であった。高橋選手への期待から良い環境を整備したが、その期待に応える成果（成績）は得られなかった。

原因：本人の精神力と指導者の指導力

#### ⑧情報戦略

不十分である。

原因：語学力が劣るにも関わらず、他国と連携を図れていない。

### 3. 【成果】

高橋選手について、公式練習時、上位選手の努力度数は低いとは言え滑走タイムが上位に食い込めるようになった。このことは今まで数少なかった。

### 4. 【日本チームの現状から見た課題】

#### ①スプリントタイムの強化向上

目標 トップ選手との差を0.2秒以内にする←×なら10位以内には入れない

トップ選手との差が約0.1秒で上位争い、約0.2秒で10位以内争い、約0.3秒で15位以内争い、約0.4秒で20位以内争いが可能と考える。

#### ②滑走技術の強化向上

目標 イメージする滑走を実際に完璧に行う技術の構築←×なら上位に入れたい

#### ③メンタル強化

試合時、持ち合わせた能力を十分に発揮できる強靱な精神力の習得←×なら上位に入れない

#### ④チーム力の構築

男女別々の取り組みの撤廃

チームビルディングによる個の連携（協調性）を強化しチーム力の構築。

行動規範（尊重、尊敬）の作成見直しと徹底

個の強化（人間力、コミュニケーション能力、論理的思考、論理的言語）

#### ⑤競争原理の構築

国内の競争原理の構築

選手発掘と有望若手選手の強化育成をし、有望選手を WC、ICC、EC、NAC に積極的に派遣する。

#### ⑥選手選考方法の見直し

選手発掘：フィールドテスト

海外遠征派遣選手選考：プッシュ記録会、プッシュ選手権、氷上滑走

前後期のメンバーの入替え：海外大会成績、国内大会成績、プッシュタイム、その他

#### ⑦他国との連携構築

現場の意見を最重要視した上で、他国との連携を構築する。

#### ⑧用具の研究開発

自国で開発するか、他国から購入する場合であってもその用具の知識を学び十分に性能を引き出せるようにする。

#### ⑨スタッフの育成と確保

指導方法の一貫性、統一性の構築

海外遠征に帯同可能な専任スタッフの育成

スタッフ有給性の構築

#### ⑩リーダーの育成

全体をけん引するリーダーの養成

#### ⑪事業の充実

資源（予算）の有効活用

公費、私費事業の区分け

国内合宿の実施

#### ⑫予算の有効活用

必要な人材と必要な事業に予算を投入する。

#### ⑬活動予算の確保

新規スポンサー開拓、イベント開催、グッズ販売等、他力に頼るのではなく自力の努力を積極的に行う。

2015-2016 日本選手 WC/ICC/WM 成績一覧

2015-2016 日本選手 WC/ICC/WM 成績一覧										
	高橋弘篤 IBSF rank 21			小口貴子 IBSF rank 22						
	順位/参加数	スプリント差	ゴール差	順位/参加数	スプリント差	ゴール差				
WC1 (Altenberg)	19/25	0.37	1.39				スプリント差、ゴール差:その大会の トップ選手との合計タイムの平均値			
WC2 (Winterberg)	12/26	0.26	0.86							
WC3 (Koenigssee)	24/26	0.21	2.05							
WC4 (LakePlacid)	15/26	0.28	1.43	13/21	0.19	1.02				
WC5 (ParkCity)	16/26	0.22	1.33	17/21	0.23	1.14				
WC6 (Whistler)	16/26	0.23	1.47	18/20	0.17	1.55				
WC7 (St.Moritz)	13/28	0.27	1.30							
WC8 (Koenigssee)	22/28	0.19	1.49	14/22	0.12	1.61				
WM (Igls)	20/34	0.33	1.17	23/26	0.35	1.53				
	笹原友希 IBSF rank 34			小口貴子 IBSF rank 22			小室希 IBSF rank 39			
	順位/参加数	スプリント差	ゴール差	順位/参加数	スプリント差	ゴール差	順位/参加数	スプリント差	ゴール差	
ICC1 (LakePlacid)	7/19	0.34	0.80	4/11	0.16	0.36				
ICC2 (LakePlacid)	8/19	0.20	0.78	5/11	0.10	0.48				
ICC3 (Whistler)	9/21	0.15	1.12	6/11	0.10	0.44				
ICC4 (Whistler)	13/21	0.24	1.48	9/11	0.14	0.89				
ICC5 (Igls)	16/26	0.42	1.28				14/19	0.52	1.60	
ICC6 (Igls)	17/26	0.47	1.30				16/19	0.54	1.42	
ICC7 (Koenigssee)	8/24	0.42	1.38				12/16	0.37	1.52	
ICC8 (Koenigssee)	14/24	0.44	1.70				14/16	0.39	2.13	

# Youth Olympic Games 2016 Lillehammer 報告

## 1. 活動

	コース	日程	選手	スタッフ
トレーニング	Lillehammer	10/11-18	郷内翔 木下凜 伊地知真優	Ueli Geissbühler 進藤亮祐 居石真理絵
選考レース	Konigssee Igls Lillehammer	11/21-27 11/28-12/6 12/7-19	郷内翔 木下凜 伊地知真優 大井遥 大井まどか	Ueli Geissbühler 進藤亮祐 居石真理絵
YOG	Lillehammer	2/7-23	郷内翔 伊地知真優 大井まどか	鈴木省三 Ueli Geissbühler 進藤亮祐 居石真理絵

## 2. レース結果 (順位)

	選考レース				選考レース ランキング	YOG
	Igls		Lillehammer			
	第3戦	第4戦	第5戦	第6戦		
郷内翔	29 / 36	27 / 36	29 / 35	26 / 35	29 / 36	15 / 20
木下凜	30 / 36	32 / 36	34 / 35	35 / 35	35 / 36	-
伊地知真優	14 / 25	9 / 25	18 / 24	15 / 24	17 / 26	10 / 20
大井遥	24 / 25	23 / 25	23 / 24	22 / 24	25 / 26	-
大井まどか	20 / 25	22 / 25	24 / 24	23 / 24	24 / 26	19 / 20

## 3. 活動概要

YOG リレハンメル大会に向けて、リレハンメルでの事前トレーニング、選考レース、YOG 本戦の活動を実施した。選考レースに参加したのは、郷内翔、木下凜（宮城県連盟）、伊地知真優（JSC 事業、長野県連盟）、大井遥、大井まどか（長野県連盟）の5名。スタッフはJSC 事業として Ueli Geissbühler（コーチ）、居石（コーディネーター）、仙台大学事業として進藤亮祐（コーチ）が帯同した。活動に必要な費用は、各選手の自己負担で実施した。（伊地知選手はJSC 負担、YOG 本戦はJOC 負担）

YOG 本戦に向けた選考基準については、国枠数に応じて選考レースランキング上位から選ばれる、という基準を設定した。選考レースの結果、男子1枠、女子2枠の国枠を獲得し、ランキング上位から郷内、伊地知、大井まどか選手が日本代表としてYOG 本戦に出場した。

選考レース第1戦、2戦は Lake Placid で開催された。しかしながら、若い初心者選手たちにとって Lake Placid は難しく、怪我等のリスクも高いと考え、第1戦、2戦を回避し第3戦から出場することとした。結果的に特にヨーロッパの国は第1戦、2戦に出場しておらず、アメリカ、ブラジル、ラトビア、韓国のみであった

選考レース第3戦前に Konigssee での滑走練習を行った。この期間、IBSF のトレーニングウィークに参加した。その後、Igls および Lillehammer での公式練習、レースに参加した。

YOG 本戦は日本選手団として、鈴木省三（チームリーダー）が帯同し、村外のサポートスタッフとして Ueli Geissbühler、進藤、居石が帯同した。Ueli Geissbühler は競技会場に入ることが可能となるようエキストラのパスを取得した。進藤、居石はメディアパスを取った。YOG はメディアパスが比較

的簡単に取れ、競技会場に問題なく入ることが可能であったため、とても有効であった。現地においては、競技会場に車を入れるためのパスを1枚取得し、ソリの運搬に活用した。

今回の YOG は冬季大会として第2回目であった。前回大会より、参加国数も増えてレベルも上がっていたと推測される。ドイツなどユース世代ながら5年近くの滑走経験を持つ国もある一方で、YOG に向けて競技を始めて2シーズン目という国もいくつもあったようである。日本の郷内、伊地知選手も2シーズン目であり、大井まどか選手は5年目であった。郷内選手は男子選手のうちで最年少であった。男子は体格の大きい選手も多い中、選考レースでは苦戦していたものの、本戦では15位となったことは良い結果であったと考えられる。伊地知選手は日本人選手の中では最高の10位を獲得した。2シーズン目であったことを考えると、健闘したと考えられる。前回大会の結果と比較して、今大会においては、日本チームとして良い結果を残すことができたと考えられる。

ユース世代の選手たちにとって、YOG は大きな目標であり、モチベーションとなったと感じている。YOG に向けてたくさんのコースでの滑走経験、国際レース経験をつむことができたことは彼らにとって大きな財産となったと考えられる。そして、活動の中でパフォーマンスが向上し、大きな成長が認められた。

YOG に向けた今シーズンの活動については、Ueli Geissbühler コーチにコーチングを受けることができた。シーズンを通してレースまで指導をしていただけたことで、選手との信頼関係もでき一貫した指導の下でレースに向かうことができた。このことはパフォーマンス向上に役立ったと考えられる。また、進藤コーチもシーズンを通じてサポートに尽力していただいたことは、とても有効であった。しかし、今回の取り組みにおいては、仙台大学、JSC のプロジェクトが関わったことで実現できたものであり、今後は日本連盟としてのプランのもので実施することができれば、より良いと感じた。

## 015-2016 North American Cup (NAC) 活動報告

### 1. 活動

第1戦 第2戦	Calgary	宮嶋克幸、百瀬健渡、富田大喜 小室希、池田美貴
第3戦 第4戦	Whistler	宮嶋克幸、百瀬健渡 小室希
第5戦 第6戦	Park City	宮嶋克幸、後藤大 釣舟さやか、野口明日香 コーチ：田山真輔

### 2. 成績

	第1戦	第2戦	第3戦	第4戦	第5戦	第6戦
宮嶋克幸	12 / 26	12 / 26	3 / 22	2 / 21	11 / 26	10 / 26
百瀬健渡	18 / 26	19 / 26	21 / 22	21 / 21		
富田大喜	21 / 26	18 / 26				
後藤大					25 / 26	25 / 26
小室希	8 / 16	8 / 17	4 / 12	5 / 11		
池田美貴	15 / 16	15 / 17				
釣舟さやか					14 / 18	17 / 18
野口明日香					16 / 18	13 / 18

### 3. 総評

#### ○第5・6戦 Park City (帯同コーチ：田山)

後藤選手、釣舟選手、野口選手にとっては、初めての海外遠征であった。渡航からレースまで短期間

で進めるスケジュールであったため、初めてのことに對して精神的負担が大きい遠征となった。

大会期間では、公式練習 6 本で大会となるが、6 本で滑走をまとめることは、慣れていない選手にとっては、難しい日程である。しかし、スケルトンを始めて 1 年目の釣舟選手、野口選手共に、滑走の基本を日本での 2 ヶ月間の練習で得ていたことにより、今までの日本人選手と比べ、比較的良い滑走ができていたと感じる。今までの日本人選手の多くは、長野での滑走はできるが、海外のコースを滑ると、タイミングをつかめず、上手く滑ることができていなかった。

これに関しては、日本において選手を教える環境が変わってきたことが要因として考えられる。今までは、滑走し、選手自身で考えて考察しなければならなかったのに対し、最近では、滑走の感覚、操作のタイミング、重要ポイント、道具の扱い等について、指導者や先輩から、長年かけて掴んできた知識を教えてもらうことにより、早く習得できるように変わってきたからだと考える。

○各選手について

#### 宮嶋選手

滑走は前半から加速し、櫂を滑らせる感覚はとても高い。

しかし、スプリント能力が低いため、上位へ行くためにはスプリント能力の向上が必要である。

#### 百瀬選手

スタートダッシュに優れ、滑走技術の向上が見られた。今後、更に滑走技術を磨き、ソリのセッティングを合わせ、海外遠征のスケジュールに慣れることで更なる成長が期待できる。

#### 富田選手

操作方法についてはよく理解しており、身体も鍛えられているため、ソリをコントロールする身体は十分である。しかし、操作のタイミング、コースの理解については課題が残る。

2 試合目は、1 試合目の失敗を克服するなどの調整力を発揮し、課題克服に取り組んだ。

今後はスパイラルも含めて滑走経験を積み、さらなる滑走技術の向上を目指必要があると感じた。

#### 後藤選手

2 年目にしては、上手く滑走ができているが、櫂をスピードに乗せられていない。

ラインを通す事はできても、無理やり感があるので、タイミングを読み、少ない操作で滑走ができればなお良いと感じる。

#### 池田選手

プッシュ大会、選考会でスプリントを評価されていたが、前期 NAC ではその成果が見られなかった。まだ 2 年目の彼女には、スケルトンという競技に数多く触れ、プッシュも滑走もより多く経験を積むことが大切であると考え。

英語でコミュニケーションが取れ、海外のコーチへ積極的に働きかけ、自ら滑走技術を伸ばすために精力的に取り組んでいた。また、コンディショニング、滑走、ソリ整備などについても非常にまじめに取り組んでいた。

#### 釣舟選手

陸上のスプリント能力に比べ、プッシュ時のタイムが良くない。よりプッシュ練習が必要であると考え。

滑走では、操作のタイミングを的確につかめておらず、カーブ中の遠心力を感じ、それに合わせて操作を行う感覚を磨くことが重要だと感じる。

## 野口選手

陸上のスプリント能力に比べ、プッシュ時のタイムが良くない。より、プッシュ練習が必要である。また、身体も硬いため、柔軟性も必要だと考える。

滑走では、初めてのコースにもかかわらず、上手くラインを通すことができていた。ソリの乗り方については修正が必要だが、カーブ中の操作のタイミングは良いと感じる。

イメージトレーニングを常に行っており、その成果が、初めてのコースでも上手く滑れることに繋がったと考えられる。

## ○海外の動向

北京オリンピック開催が決定したことに伴い、中国が強化を開始しており、NAC に中国の選手が参加していた。選手は、今シーズンからスケルトンを始めており、スプリント能力の高い選手をそろえていた。コーチとして、トリノオリンピック銀メダリストの Jeff Pein 氏が帯同していた。用具も揃え、スタッフも充実していた。

そのせいか、中国人選手の中には、練習から 1 年目とは思えないほど成長している選手もあり、スプリント能力、滑走能力が伴い、表彰台争いをするまでになっていた。後期 NAC (Park City) には、ワールドカップへ出場している選手も参加しており、上位のレベルは低くないにもかかわらず、上位に食い込んでくる選手がいるという事は、非常に先の見通しが明るいように思える。

韓国の Yun Sungbin 選手が、短期間でトップ選手に成長したのも、平昌オリンピックが決まり、Jeff Pein 氏を初め、海外のスケルトン競技に精通している指導者に指導を受けていたことが急成長の要因であると考えられる。このことは、選手の成長には、指導者の能力が非常に重要である事を示している。

各国がこのような取り組みを進めている中、日本においても上位の成績を上げるためには、指導者を始めスタッフなど選手を取り巻く環境を整備することが不可欠であると考え。そのための資金をいかに用意するか、ということも大きな課題と感じた。

## 《指導者養成部》

### (1) 27 年度受講について

27 年度は、上級コーチ 1 名、公認コーチ 3 名の受講希望者があり、全ての受講者について承認を受けての受講となった。受講に関しては、(公財)日本体育協会の共通科目プログラム及び(社法)日本ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟の専門科目プログラムについて実施した。

日体協の共通科目プログラムは、全ての受講者が受講を完了し合格した。なお共通科目は、上級コーチが共通科目 I~IV の受講、公認コーチが共通科目 I~III の受講を完了した後に、各地における受験会場にて試験を受け合格しているものである。

専門科目に関しては、以下の通りの結果となっている。

上級コーチは資格審査の結果、これまでの実績を評価し、実技を免除して基礎理論と指導実習を行った。基礎理論は百瀬が担当し、レポート課題(ナショナルチームにおける強化策)の提出を持って総合判定を行った。なお提出レポートは、連盟指定の判定員(2 名)によって審査が行われ合格が確認された。

公認コーチは、全員が専門科目受講対象者となり、本年度は昨年度からの継続受講者を含めて 6 名の受講により実施した。

専門科目開講に関しては、ボブスレーナショナルチームヘッド・ニッキ氏により、27 年 9 月に基礎理

論と指導実習(総計 12 時間)が行われた。また 9 月、10 月に鈴木、大賀、越、小林、百瀬による担当で基礎理論、指導実習(総計 22 時間)が行われた。レポート課題(指導における年間計画の作成)の提出を持って総合判定を行った。審査は連盟指定の判定員(1 名)による審査によって合格を確認した。その結果、受講生 6 名中 3 名の合格が確認された。

(2) 27 年度資格認定者

・ 上級コーチ資格取得者

小口貴久

・ 公認コーチ資格認定者

住澤祐樹、大峽俊之、大井伸司

・ 28 年度継続

進藤亮祐、脇田寿雄、宮本利成

(3) 次年度への課題

- ・ 次年度は、養成事業の継続を第一に、本指導者養成システムを構築することを目標とする。本年度、日体協との連携が上手くいかない場面もあったので、連携を取りながら進めて行きたい。
- ・ 次年度は、公認コーチ 7 名の受講が日本連盟、日体協にて認定されている。28 年度継続者と併せて 10 名の受講を予定している。
- ・ 28 年度実施に向けて、計画的に事業展開していきたいと考えている。

《人材開発部》

◆ 実施事業

【トライアウト】(ボブスレー・スケルトン人材開発)

《関西地区》

日時：平成 27 年 7 月 11 日(土)

場所：加古川運動公園陸上競技場(兵庫県加古川市)

実施内容：コンバインドテスト

① 45m 走

② 立ち幅跳び

③ 砲丸両手フロント投げ(男子 7.26 kg、女子 4 kg)

参加人数：合計 27 名

内訳 男子 16 名 (一般 6 名、大学生 1 名、高校生 14 名)

女子 6 名 (大学生 1 名、高校生 5 名)

備考：参加女子 1 名が JSC スケルトン女子タレント発掘事業選手に採用される。

《関東地区》

日時：平成 27 年 8 月 1 日(土)

場所：戸田市スポーツセンター陸上競技場(埼玉県戸田市)

実施内容：コンバインドテスト

① 45m 走

② 立ち幅跳び

③ 砲丸両手フロント投げ(男子 7.26 kg、女子 4 kg)



参加人数：合計 9 名

内訳 男子 8 名（一般 7 名、大学生 1 名）

女子 1 名（一般 1 名）

備考：参加女子 1 名がボブスレーナショナルチームに採用される。

#### ◆総評

- ・良い人材が集まらない ➡ 一般公募より、スカウト（一本釣方式）が効果的では？
- ・良い人材が集まらない ➡ 告知の範囲や方法、開催場所の見直しが必要では？
- ・各競技部会との連携が必要 ➡ 情報の共有、どんな人材が欲しいのか？
- ・育成ビジョンが必要 ➡ 積極的なアプローチが出来ない

\*リージュ競技は、リージュ競技部会独自に 9 月 5 日（長野）、9 月 6 日（札幌）にコントロールテスト実施。

### (3) 大会・審判委員会

#### 《大会運営部》

大会運営部の主たる業務として、上記 3. に記載されている国際大会並びに本連盟主催大会の運営を行った。27 年度はカレンダーの都合上、日程調整が煩雑となったところもあったが、昨年度の課題解消を図るために、全日本スケルトン選手権におけるスパイラルの通常の練習滑走運営を活用した予選会の実施や、滑走経験が充実してきたシーズン後半期における日連公認大会としてチャレンジカップ及び JOC ジュニアオリンピックカップの 1 月後半開催などの変更を行ったにもかかわらず、いずれの大会においても、参加した競技役員 노력、参加選手等の協力もあり、ほぼ日程案どおりの円滑な大会運営をすることができ、総じて良好な大会運営であった。改めて、道府県連盟を含む関係各位に感謝申し上げたい。今後も、運営主体は会場地元の長野県連を中心に、全ての連盟の協力を得ながら大会運営に当たりたい。

なお、課題解決に向けた様々取組を進めているものの、大会運営の課題として以下のものが残っている。

#### (1) 大会時期

- ①各プッシュ大会は、新たな逸材の選手の発掘に有効となっているが、冬季に向けた新人選手の強化指導には 9 月開催では期間が短いこと。
- ②国際大会のレースカレンダーの都合上、年末における大会開催に適した日（週末、祭日）が限定的になってしまうこと。

#### (2) 大会日程

3 競技同日開催はスケジュール調整が厳しく、悪天候への対応が困難。（競技滑走中に、次の種目の準備を開始しなくてはいけない状況で、競技規則を逸脱した対応も必要となるほか、ボブスレーは 2 人乗りと 4 人乗りの両種目への参加が困難となっている。）

#### (3) 役員配置

参加可能人数などの問題から、十分な配置が難しいこと。（特に、転倒時の対応）

#### (4) 次年度への課題

28 年度の大会日程、競技役員配置、大会運営においては、上記の課題を考慮しながら進めることとし、

① プッシュ大会の開催時期の前倒し

② 年末に実施する大会において、参加選手の状況を考慮しながら必要に応じて兼用大会の開催などを実施したい。

また、ここ数年の大会運営における課題の一つである競技役員の確保は、各道府県連盟の協力により、改善の方向が見られるものの、平日の公式練習日を中心に十分な競技役員数はいまだ確保が難しい状況が続いている。

特に、「最近の国際大会運営事情を知っている競技役員」の確保は大きな課題である。日本で国際大会が開催されていない昨今、国内大会の運営は所詮「井の中の蛙」で、世界の常識感覚からずれてしまう虞がある。いつ国際大会が来てもいい体制を維持するためには、年々変化する国際大会運営状況を知っている人が必要である。こうしたことを考えると、運営スタッフのリーダーを養成するために、3～4年に1度でも、リーダー候補者を何らかの方法で国際大会に参加させることの検討が必要かと思われる。

#### 《審判部》

審判部は今年度、大会運営に必要不可欠な競技役員の有資格者をより多く確保し、スキル向上を図るための取組を全国的に行った。

上記4. のとおり、ここ数年、各加盟団体における審判資格講習会あるいはルール講習会が開催され、競技役員の有資格者が増えてきていることで、多くの大会参加者が規則や運営側の考え方を理解し、より円滑な大会運営に結びついてきているといえる。

また、国内大会出場選手に対して基本的なルール及びマナーを事前に周知することも、円滑な大会運営や選手強化に結びつくものとして、国内大会出場を目指す選手のためのベーシックガイドを毎年度更新しながら活用している。

なお、将来の大会運営のためにも、「次世代の国際審判員資格者」の確保は大きな課題である。27年度には新たな国際審判員資格・マテリアル検査官資格の取得者はなかったが、国際大会審判を経験することは、世界的な現状を理解することに大変有益なことから、該当者ができることを切望するものである。

#### 7. その他

##### コンプライアンス・倫理委員会

今期も特別な事案が発生せず、委員会開催はなかった。ただ海外遠征における移動中のアクシデントで多大な費用が発生し、練習時の怪我は今期も多発した。また人的なサポート不足からマネジメントに問題が発生し、事後報告決算の遅れが目立った。今後登録競技者に厳重なる注意勧告を行い、自己責任における費用は連盟で負担せず、当事者に請求することを事前に説明し、コンプライアンスの会議を大会時に開催しなければならない。また連盟側においても改めて危機管理の必要性を認識し、指導者、役員にも指示していく必要性を痛感した。

8. 連盟の概況（平成 27 年 5 月 31 日現在）

(1) 加盟団体に関する事項

加盟団体名	代表者
北海道ボブスレー・スケルトン連盟	石川 裕一
北海道リュージュ連盟	長島 邦夫
宮城県ボブスレー・リュージュ連盟	大沼 迪義
長野県ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟	小坂 憲次
大阪ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟	藤原 達治郎

(2) 正会員に関する事項

氏名	所属連盟
石川 裕一	北海道ボブスレー・スケルトン連盟
堀江 三定	長野県ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟
藤原 達治郎	大阪ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟
五味 康昌	有識者
高山 崇彦	有識者

(3) 役員に関する事項

役職	氏名	所属先
代表理事会長	北野 貴裕	北野建設株式会社
理事副会長	北村 正博	株式会社システックス
専務理事	荒井 久也	株式会社荒井商事
理事	石川 裕一	株式会社ぷらう
理事	鈴木 省三	仙台大学
理事	大賀 康弘	兵庫県立松陽高校
理事	加藤 英俊	仙台大学
監事	早川 吉春	霞エンパワーメント研究所
監事	立川 宏	株式会社北洋銀行
顧問	五味 康昌	三菱 UFJ 証券ホールディングス株式会社
顧問	水野 誠一	株式会社 IMA
顧問	高山 崇彦	TMI 総合法律事務所

(4) 常置委員会に関する事項

委員会名	委員	備考
総務委員会		
委員長	荒井 久也	日本ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟
委員	山本 忠宏	日本ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟
〃	古川 靖彦	北海道ボブスレー・スケルトン連盟
〃	伊藤 徹	北海道リュージュ連盟
〃	大槻 誠	宮城県ボブスレー・リュージュ連盟
〃	藤牧 博和	長野県ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟
〃	船橋 宏哉	大阪ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟

競技委員会			
委員長	鈴木省三		
副委員長	大賀康弘		
委員	大賀康弘	ボブスレー強化部長	ウイリ・ガイスビューラー Ueli Geissbuhler 通称 ウィリーコーチ ニコラス・アルブレヒト Nikki Albrecht 通称 ニッキコーチ
〃	戸城正貴	リュージュ強化部長	
〃	住澤祐樹	リュージュ強化部長補佐	
〃	鈴木省三	スケルトン強化部長	
〃	百瀬定雄	指導者養成部長	
〃	越和宏	人材開発部長	
〃	鈴木省三	医・科学部長（兼務）	
大会・審判委員会			
委員長	小林忠司	大会運営部長	
委員	藤牧博和	〃 副部長	
〃	寺澤政俊	審判部長（兼務）	
〃	小林忠司	〃 副部長（兼務）	
〃	寺澤政俊	大阪ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟	
〃	前田昌也	北海道ボブスレー・スケルトン連盟	
〃	岡本信吾		

(5) 登録競技者に関する事項

①審判員（うち国際審判員）

ボブスレー・スケルトン	73名	( B10・S2 )	計117名
リュージュ	44名	( 10 )	( 22 )

②強化スタッフ(うち JOC 強化スタッフ)

コーチング	36名	(36)	
マネジメント	3名	( 3 )	
情報・戦略	0名	( 0 )	計46名
医・科学	7名	( 7 )	( 46 )

③選手(うち JOC オリンピック強化選手)

ボブスレー	75名	(11)	
リュージュ	33名	( 3 )	計181名
スケルトン	73名	( 5 )	( 19 )

※ JOC オリンピック指定強化選手・強化スタッフは別紙に一覧表を記載。

(6) 事務局に関する事項

氏名	職種
荒井久也	事務局長
南澤光弥	事務局次長
山本忠宏	事務局次長
山寄雅弘	事務局（経理）
田中沙夜香	事務局（経理）
池田るみ	事務局

【別添】

平成 27 年度事業報告一覧

大会活動名	場 所	役員	選手	期 間
2015 全日本ブッシュボブスレー・スケルトン選手権大会	長野市 スパイラル	22	B 23 S 33	H27. 9/20
競技会開催（振興基金） 2015/2016 全日本ボブスレー・スケルトン選手権大会（第 50 回） 第 49 回全日本リュージュ選手権大会 ※第 23 回 J r オリンピックカップ(L)	長野市 スパイラル	延べ 167	L 8/7 B 56 S 41	L H27. 12/24～12/26 (3 日間) ※Jr 同時開催 B H27. 12/18～12/20 (3 日間) S H27. 12/11～12/12 (2 日間) 予選 H27. 12/25～12/27 (3 日間)
スポーツ大会開催（振興くじ） 第 7 回 JBLSF チャレンジカップ大会 第 23 回 J r オリンピックカップ	長野市 スパイラル	延べ 49	L 9 B 10/2 S 23/18	H28. 1/23～1/24 (2 日間)
アンチ・ドーピング検査（振興くじ） 対象：全日本 B L S 選手権大会 6 検体	長野市 スパイラル	検査員 9	6	L H27. 12/26 1 検体 B H27. 12/20 2 検体 S H27. 12/27 3 検体
FIL 第 1 回アジアリュージュ選手権	長野市 スパイラル	※全日本大会 同日開催	32	H27. 12/24～12/27 (4 日間) (※全日本 L・S 大会 同日開催) 日本 14・インド 3・韓国 8・台湾 4

ボブスレー活動名		場 所	コーチ/選手	期 間
国内合宿	国内強化合宿① (JOC)	長野市スパイラル	コーチ/Nikki Albrecht・大賀・大石・鈴木(省) アシスタント/宮本・鈴木(寛)・桧野 選手/黒岩・中村・浅野・青木・伊藤・中山 押切・本間・川崎・浅津	H27. 7/14～7/20 (7 日間)
国内合宿	ブッシュ選手権及びコン バインテスト	長野市スパイラル	コーチ/Nikki Albrecht・大賀・大石・鈴木(省) アシスタント/宮本 選手/黒岩・中村・浅野・青木・伊藤・中山 押切・本間・川崎・浅津	H27. 9/17～9/22 (6 日間)
国内合宿	国内強化合宿② (JOC)	長野市スパイラル	コーチ/大賀・大石 アシスタント/宮本・生駒 選手/黒岩・浅野・伊藤 押切・本間・川崎・浅津・日下	H27. 10/9～10/12 (4 日間)
国内合宿	国内強化合宿③ (JOC)	長野市スパイラル	コーチ/大賀・大石 アシスタント/生駒 選手/中村・中山・森田・豊山・佐用	H28. 1/14～1/17 (4 日間)
海外派遣	EC 前期 1・2・3 (JOC)	ドイツ	コーチ/Nikki Albrecht アシスタント/宮本 選手/黒岩・浅野・伊藤 押切・本間・川崎・浅津・日下	H27. 11/8～12/8 (31 日間)
海外派遣	EC 後期 6・7・8 (JOC)	ドイツ オーストリア スイス	コーチ/Nikki Albrecht アシスタント/宮本 選手/黒岩・浅野・伊藤 押切・本間・川崎・浅津・日下	H28. 1/2～2/1 (31 日間)

リュージュ活動名		場 所	コーチ/選手	期 間
国内合宿	J r 冬季強化合宿①	長野市 スパイラル	コーチ/戸城・住澤 選 手/小林・新野・石川(雪)・石川(蒼)・宮下	H27. 12/15～12/19 (5 日間) H27. 12/21～12/21 (4 日間)
国内合宿	J r 冬季強化合宿②	札幌 藤野競技場	コーチ/戸城・住澤 選 手/小林・新野・青谷・石川(雪)	H28. 2/18～2/21 (4 日間)
海外派遣	WC 前期 1・2・3 (JOC)	ルーマニア・ラトビア オーストリア・ドイツ アメリカ・イタリア	選手/金山	H27. 10/4～12/5 (73 日間)
海外派遣	WC 後期 5・6 世界選手権 (JOC)	ラトビア・ドイツ イタリア	選手/金山	H28. 1/3～2/2 (31 日間)

スケルトン活動名		場 所	コーチ/選手	期 間
海外合宿	海外強化合宿（JOC）	ラトビア	コーチ/越 選 手/高橋	H27. 10/13～11/5 (24 日間)
海外派遣	WC 前期 1・2・3 (JOC)	ドイツ	コーチ/越 選 手/高橋	H27. 11/14～12/14 (31 日間)
海外派遣	WC 後期 4～8 世界選手権（JOC）	アメリカ・カナダ・スイス オーストリア・ドイツ	コーチ/越・Ueli Geissbuhler・小口貴久 選 手/高橋・小口貴子	H28. 1/2～1/25 (24 日間) H28. 1/30～3/1 (32 日間)
海外派遣	ICC 前期	ドイツ	選 手/笹原・小口	H27. 10/28～12/5 (48 日間)
海外派遣	ICC 後期	ドイツ	選 手/笹原・小室	H28. 1/1～1/17 (17 日間)
海外派遣	NAC 前期	カナダ	選 手/宮嶋・百瀬（JOC） 小室・池田・富田	H27. 10/25～11/30 (37 日間)
海外派遣	NAC 後期	カナダ	コーチ/田山 選 手/宮嶋・後藤・野口・釣舟	H28. 2/28～3/7 (9 日間)
海外派遣	Jr 世界選手権 (JOC)	ドイツ	コーチ/鈴木 選 手/宮嶋	H28. 1/16～1/25 (10 日間)
海外派遣	第2回 ユースオリンピック選手権	ノルウェー	コーチ/鈴木 選 手/郷内・伊地知・大井	H28. 2/19

【参考】都道府県連盟より報告のあった私的海外遠征

活動名		場 所	コーチ/選手（所属連盟）	期 間
リージュ	海外滑走練習 インターナショナルトレーニングウィーク FIL ネーションカップ	ドイツ オーストリア	コーチ/小口（長野） 選 手/田中（長野）	H27. 10/15～11/30 (49 日間)
スケルトン	氷上事前滑走練習	カナダ	コーチ/田中（北海道） 選 手/高山（長野） 藤原（北海道）	H27. 10/26～11/6 (11 日間)
ボブスレー	新型ソリの氷上検証及びトレーニング	ノルウェー	選 手/脇田（北海道） 熊谷（北海道）	H27. 10/30～11/8 (10 日間)
リージュ	海外滑走練習	カナダ	コーチ/小口（長野） 選 手/田中（長野）	H28. 2/11～2/20 ※コース事故の為 キャンセル
リージュ	パイロットスキル向上滑走トレーニング	スイス	コーチ/Sanktjohanser 通 訳/栗山 選 手/浅津（北海道） 川崎（北海道） 中村（北海道）	H28. 2/14～3/7 (23 日間)

JOCオリンピック強化指定選手・強化スタッフ一覧

【JOCオリンピック強化指定選手 19名】(平成28年3月31日現在)

ボブスレー	男子	黒岩	俊喜	ボブスレー	女子	日下	望美
ボブスレー	男子	中村	一裕	リュージュ	男子一人乗り	金山	英勢
ボブスレー	男子	浅野	晃佑	リュージュ	男子一人乗り	田中	祥兵
ボブスレー	男子	青木	健二	リュージュ	男子一人乗り	吉崎	雄貴
ボブスレー	男子	伊藤	隆太	スケルトン	男子	高橋	弘篤
ボブスレー	男子	中山	雄介	スケルトン	男子	笹原	友希
ボブスレー	女子	押切	麻李亜	スケルトン	男子	宮嶋	克幸
ボブスレー	女子	本間	南	スケルトン	女子	小室	希
ボブスレー	女子	川崎	奈都美	スケルトン	女子	大向	貴子
ボブスレー	女子	浅津	このみ				

【JOCオリンピック強化スタッフ 46名】(平成28年3月31日現在)

種別 B:ボブスレー L:リュージュ S:スケルトン

コーチング	強化コーチ	B	大賀	康弘	コーチング	強化コーチ	L	小口	貴久
コーチング	強化コーチ	B	高山	淳	コーチング	強化コーチ	L	小口	勝久
コーチング	強化コーチ	B	浜田	英之	コーチング	強化コーチ	L	宮本	映理子
コーチング	強化コーチ	B	大石	博暁	コーチング	強化コーチ	S	雨宮	智子
コーチング	強化コーチ	B	前田	昌也	コーチング	強化コーチ	S	伯川	三喜子
コーチング	強化コーチ	B	白谷	依子	コーチング	強化コーチ	S	船橋	宏哉
コーチング	強化コーチ	B	堀	高士	コーチング	強化コーチ	S	與治	希
コーチング	強化コーチ	B	間野	史子	コーチング	強化コーチ	S	佐高	博之
コーチング	強化コーチ	B	城田	仁	コーチング	強化コーチ	S	田中	孝和
コーチング	強化コーチ	B	沼崎	久幸	コーチング	強化コーチ	S	伊藤	明和
コーチング	強化コーチ	B	觸澤	高英	コーチング	強化コーチ	S	鈴木	省三
コーチング	強化コーチ	B	桧野	真奈美	コーチング	強化コーチ	S	進藤	亮祐
コーチング	強化コーチ	B	脇田	寿雄	コーチング	強化コーチ	S	越	和宏
コーチング	強化コーチ	B	大峽	俊之	コーチング	強化コーチ	S	大井	伸司
コーチング	強化コーチ	B	武田	雄爾	コーチング	強化コーチ	S	田山	真輔
コーチング	強化コーチ	B	鈴木	寛	マネジメント	サポート	S	宮脇	哲也
マネジメント	サポート	B	宮本	利成	医・科学	ドクター	B・L・S	桑原	郁男
マネジメント	サポート	B	生駒	良弘	医・科学	ドクター	B	橋本	秀輝
コーチング	強化コーチ	L	小川	由美恵	医・科学	トレーニングドクター	B	竹村	英和
コーチング	強化コーチ	L	戸城	正貴	医・科学	ドクター	L	山崎	生久男
コーチング	強化コーチ	L	村川	誠一	医・科学	デンティスト	L	森	修二
コーチング	強化コーチ	L	百瀬	定雄	医・科学	薬剤師	L	笠師	久美子
コーチング	強化コーチ	L	住澤	祐樹	医・科学	デンティスト	L	工藤	勝